

地域支援心理研究センター紀要の創刊に期待する

センター長 井上知子

追手門学院大学地域支援心理研究センターは2004年4月に文部科学省私立大学高度化推進事業の中のオープンリサーチセンターに選定され、設立された。

現代社会は、かつての日本の歴史の中で経験したこともないほど精神的な荒廃を来していると言っても過言ではないと思われるような陰惨な事件が多発している。特に、幼児をはじめ未成年者が犠牲者にも加害者にもなる事件が頻発しているという憂うべき事態に直面している。この紀要の発刊に努力をしている間にも、幼児・児童が犠牲になった痛ましい事件の報道が次々と行われている。私たち人間の将来は、子どもたちが担っているのであり、子どもは人類の宝物であると考えることが間違っているはずが無い。それにも関わらず、なぜこのような事態に陥っているのだろうか。これが日本だけの状況でないことはメディアの報じるところである。ある国では幼児・児童の売買をするために誘拐が後を絶たないとのことである。売られた子どもは決して大切に育てられる訳ではない。日本以上に子どものさらされている状況が深刻な場合も多々あるのは事実である。しかし、日本の状況が他の国々と比較していいと言うことはできない。極言するならば、1人でも犠牲になっている子どもがいることはすでに問題と見なされるべきである。現在の様々な子どもを巻き込んだ事件から、日本のある政治家は、「学校の中で命の大切さを教育することが少なすぎるからだ」と声高に言う。命の大切さ

を教育することは教育の直面している問題である。しかし、命の大切さをどのように教育すれば事件がなくなるのであろうか。「教育する」、それだけですむものとは到底考えられない。現状を鑑みると命の大切さを教育しなければいけない対象は、決して学校教育を受けている児童・生徒だけではない。むしろ青年から老人までを対象にしての命の尊さの教育の必要が大いにあると思われる。

第二次大戦直後の食べるものも着るものも住むところさえもろくろく無い中で成長してきた体験から省みると、今の時代の方がかつてより豊かで食べるものも着るものも住むところにも恵まれていることは事実である。物質文化的には多大な進歩が成し遂げられた。しかし、その中で暮らしやすくなったかと問われると答えは「そうではない」という言葉しか思い当たらない。特に子どもの成長のための環境という視点から見ると、草木に囲まれた自然の中で、草木の芽が出て、野の花たちが鮮やかに色を競いながら開花し、蝶やミツバチが花に群がる中で友達と駆け回りながらいろんな遊びを次々と考えだして楽しく過ごした幼児期や児童期は、たとえ今の子どものようにきれいな服に身を飾っていなくても、たとえおいしいおやつを食べられなかったとしても、もっと多くの近隣の人たちの中で暖かく見守られながら、友達とともに成長してきたということ、それ故に心豊かに育てられたという思いを強く抱く。

地域支援心理研究センターは、現代社会で

必要とされ要請されている心理学の地域貢献に関する研究を行うことをめざしており、具体的には地域社会との連携によって心理的問題についての解決と支援の方法を開発するために、2つの研究課題を策定して5年計画で研究をスタートさせた。

2つの課題とは、次の2つである。

- (1) 子どもの問題行動解決のための地域社会、学校、家庭への働きかけに関する研究、
- (2) 学校における心理的問題を有する児童生徒に対する支援・母親に対する子育て支援の方法の開発と心理臨床における高度の専門職の養成

現代の日本社会では、児童虐待、幼児・児童の誘拐、殺人果ては死体遺棄の様な残虐な事件の頻発、児童生徒の不登校、いじめ、親の子育て不安、教師による強制わいせつその他の犯罪などの問題のごとく指摘し始めると枚挙のいとまがないほどに事件や問題行動が多発しており、これらの問題は現代社会の様相から考えると早急に解決されるべき課題であるにもかかわらず、実際には解決することが非常に困難でもある。しかし、今まで蓄積してきた所員の研究成果を基礎にして、家庭・学校・地域社会に役立つ支援モデルの構築と実際的な支援活動、および心理的問題を有する幼児・児童・生徒に対する心理臨床的援助および心理教育的支援とその実践のために高度に訓練された専門家の養成を速やかに行うことにより、上記の2つの課題の解決を企り、社会への知の還元をしていくことを目指している。センターはその緒についたところであり、まだまだこれから本格的な研究に取り組むことが必要である。本紀要は研究し実践したことを社会に還元するための一つの手段であり、単に研究成果を発表するだけにとどまらず、実践現場においてそれぞれの専門家が問題へ取り組むための促進役となることをも期待している。

文末にこの1年間のセンターの経過を簡単

に記すことにする。2004年度は、今まで行ってきた茨木市を始め近隣の市町の教育委員会や教育研究所との連携による教育実践現場での支援が非常に多くなり、核となる組織の必要性を大いに感じる状態になった。そこで文部科学省のオープン・リサーチへの応募を行い、4月に研究構想が選定されたことにより、地域支援心理研究センターの本格的な取り組みの始動を見ることになった。6月には地域支援心理研究センターの拠点となるべき建物の建設工事が着手した。その間にも、心のクリニックを中心とした心理臨床的援助活動と、大学院生の臨床心理実習を中心にした教育・訓練は教室および心理学実験室を改築した仮の所での活動を開始して、1年間が経過しようとしている。近隣のいくつかの小・中学校及び教育研究所に対しては、その要請に応じて、学部学生及び大学院生をスクールサポーターおよびメンタルフレンドとして派遣してきた。12月には心理臨床的援助の成果を「心のクリニック紀要」創刊号として発行する運びとなった。さらに2005年2月には大学副門横に後で平面図に示した追手門学院大学地域支援心理研究センターが建ち、3月末に竣工式を完工する運びとなっている。この1年間のほとんどは、センター立ち上げのための事務およびこの建物の建築と心のクリニックの運営に費やされた。来る4月からは心のクリニックでの活動の充実はもちろんのこと、新しいセンターに完備されている設備を十分に活用しての研究の実施、公開講演、シンポジウムなどを通じての成果の公開、地域支援心理研究センター内および学外の機関（学校、公民館、その他の場所）での研修などを通して、地域社会の種々の場所で多くの人たちを対象としての実践的な貢献をすることができるよう、所員一同それぞれの専門性を活かして努めていくことを期している。